

e-ASIA 日本—ロシア—タイ 国際共同研究 「環境（自然と人間 のシステムに関する気候変動の影響と解決策）」 2021 年度 年次報告書	
研究課題名（和文）	先住民族社会とそれを取り巻く生態系の気候変動下でのレジリエンスに関する研究
研究課題名（英文）	Climate change resilience of indigenous socio-ecological systems (RISE)
日本側研究代表者氏名	Jorge GARCIA MOLINOS
所属・役職	北海道大学・北極域研究センター・准教授
研究期間	2021 年 4 月 1 日 ～ 2024 年 3 月 31 日

1. 日本側の研究実施体制

氏名	所属機関・部局・役職	役割
Jorge GARCIA MOLINOS	北海道大学・北極域研究センター・准教授	研究代表者(PI)
成田 大樹	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授	主たる共同研究者(CoPI)

2. 日本側研究チームの研究目標及び計画概要

1. タイ側研究チームメンバーを日本に迎え、タイケーススタディーについての社会経済的調査に関するトレーニングを実施（WP1）
2. タイ側研究チーム及びロシア側研究チームと共同し、それぞれの国における社会経済的現地調査（家計調査）の企画、準備、実施を行う（WP1）
3. サハ共和国（ロシア）及びカレン族地域（タイ）のケーススタディーに資するものとして、既存の社会経済的データ（WP1）及び気候・環境・生態系データ（WP3）を公開レポジトリ、政府機関及び学術的ソースより収集し、プロジェクトの共有データベースを構築する（WP5）
4. キックオフ会合及び日本側チームメンバーによる四半期会合の開催、調査とトレーニングプロトコルの準備、及びプロジェクトウェブサイトの開設（WP5）

3. 日本側研究チームの実施概要

RISE プロジェクトの初年度は、COVID-19 のパンデミックによって生じた海外渡航と国際協力に関する不確実性と制限に直面した。これらの混乱に加え、各国の資金提供機関が公

式に設定しているプロジェクト期間に時間的なずれがあり、私たちや他の研究パートナーの当初の計画もそれに合わせて変更する必要があった。タイでのプロジェクト開始が遅れたため（2021年10月）、カレン族のケーススタディーのための現地調査は、タイの新しい雨季の始まりと重なる2022年5月まで延期となった。このため、日本チームはプロジェクトの第一段階として、タイチームと協力して現地調査の計画を立て、タイチームのメンバーおよび現地協力者が2022年中にタイでカレン族の事例研究のための社会経済的・生態学的現地調査を行うために必要な監督とトレーニングを行い、系統的な世帯インタビューと伝統的な食物種の地理参照付き分布データの収集に取り組んだ。その実施のために、カレン地域の2つの調査対象村落のメンバーで構成される現地チームが訓練を受け、プロジェクトと今後協力して現地調査を実施することになる。

日本チームのメンバーは、ロシアチーム、タイチームと協力して、過去の出版物や利用可能な公開データセットのレビューを行い、両ケーススタディーの伝統的食料種のリストを作成し、利用可能なデータを探した。このデータセットには、カレン族の131種とサハ族の30種の食物について、5万件以上の質の確かな記録からなるオンライン公開リポジトリからの地域分布データ（既知の出現場所など）が含まれている。これらの分布データは、プロジェクトの2年目に地元の共同研究者が現地で収集したデータにより補完される予定である。この1年間に収集された環境データセットには、WCRPの結合モデルに関するワーキンググループ（WGCM）が第6期結合モデル相互比較プロジェクトのために作成した、現在と将来の代替シナリオのダウンスケール高解像度地形、土地利用、水文、気候データなどが含まれる。これらのデータセットはすべて、プロジェクトの2年目に、複数の異なる将来シナリオの下での重要な伝統的食料種の分布の変化を予測するために使用される予定である。

日本チームはタイチームが主催する情報提供ワークショップに遠隔参加し、カレン先住民コミュニティとこれらのコミュニティが位置する野生生物保護区の代表者にプロジェクトの目的と目標を説明し、信頼関係の構築と協力の促進を図った。

プロジェクトのウェブサイト（<https://jorgegmolinos.wixsite.com/rise>）は2021年3月に開設され、プロジェクト、チーム、研究成果に関する一般的な情報、プロジェクト活動を報告するブログ、プロジェクトからのオープンアクセス成果物を一般にダウンロードできるようにするデータポータル（登録が必要）などが提供されている。3つの研究チームが共同で作成した研究プロトコルの最終版は、オープンアクセスで公開され次第、アップロードされる予定である（現在、科学雑誌「PLOS-One」にて査読審査中）。